

大宮まなぶ新聞

Vol.013
2022年12月1日発行
OMIYA LIBRARY

図書館のご近所さん

下倉楽器店大宮店の巻



「さっそくですが、お仕事先の内容を教えてください。」
店頭では楽器を販売するほか、楽器の点検を行っています。学校向けの楽器も扱っているため、営業担当は小学校から大学まで足を運びます。買っていた学校から依頼があれば訪問メンテナンスも行っています。



「店長の三田村さんはフルートが得意
おススメはギブソンのレスポール」



下倉楽器大宮店
〒330-0846
さいたま市大宮区大門町2丁目9-2
TEL 048-643-6500
営業時間 平日・土曜 10:45～19:15
日曜・祝日 10:30～18:30
年中無休(12月31日、1月1・2日は休業)

「表に「楽器買います」という看板も出ていますね。」
「買い替えの際や演奏しなくなってしまうから大切に受け取って、店頭でUSED(中古品)の表記をつけて販売しています。ギターは特に古い楽器のファンが多くて、昔憧れた一本を購入してバンドを組まれる年配の方などがいらっしゃると思います。」



「ギターの色を聴かせて下さった半澤さん
↓現役クラリネット奏者として舞台にも立つ平井さん



「どのようなお客様が多いのでしょうか。」
「大宮のお客様は大半が学生さんです。ここ数年はこのあたりに新しいマンションがいくつも建つてきて、主婦の方や年配の方も増えていきます。コロナの自粛期間中はフォークギターが人気でした。大人向けの音楽教室Crea(クレア)があり、そちらの利用も増加しています。」

「おすめの本を教えてください。」
「『平気で他人をいじめた人たち』 見波利幸/著 PHP研究所 2021年 コロナ禍になって、まず演奏などが自粛され、音楽器など飛沫がとどくや叩かれてやめてしまう学生さんや楽器から離れたままの方がいました。そんな中でお店に来ていただくためには、店頭で立つスタッフの知識や能力が大事だと思います。だからこそ働きやすい環境についてずっと考えていて、この本はヒントとなる言葉がいろいろあります。」



「ありがとうございました。」
「お話を伺う中で、楽器に触れるお客様への想いや音楽に対する熱い気持ちがとても伝わってきて、街の楽器屋さんとして親しまれ続ける理由がわかりました。」

『タンゴ全集』ユニバーサルミュージック 2008

タンゴが好きです。力強いリズムと哀切な旋律がなんともドラマティックで、心が揺らぐと聴きたくなる長年の友人のような存在です。
タンゴは19世紀なかばにアルゼンチンの首都ブエノスアイレス周辺で生まれた音楽ジャンルのひとつです。船乗りたちが持ち込んだキューバやアフリカなどの複数の音楽が、混ざり合って誕生したと言われています。ブエノスアイレス近郊の場末の酒場などで演奏され、ヨーロッパ移民や下層階級の男女が生活の憂さを忘れるために踊っていました。
今では男女が情熱的に踊るイメージの強いタンゴですが、ごく初期には男性のソロダンスであったとか。仕事帰りの男性が、うっぶん晴らしに飲んで歌って踊って盛り上がる…。現代と通じるところがあって、光景が目に見えそうです。
哀しみはより深く、怒りはより激しく、喜びは踊るように歌い上げるタンゴの曲の魅力は、そんな背景から生まれているのかもしれないですね。
そして酒場のダンスミュージックだったタンゴは、ピアノやバンドネオン、歌、それに数々の作曲家との出会いを経て、現在のように聴いて楽しめる音楽としても進化していったのです。
CD『タンゴ全集』には、古典的名曲「ラ・クンパルシータ」から、ご存じピアノの代表曲「リベルタンゴ」まで、様々な名曲が収録されています。図書館では、タンゴに欠かせないバンドネオンを独学で始めて日本を代表する奏者となった、小松亮太さんのCDも所蔵しています。
演奏者によって多種多様なアレンジが楽しめるのもタンゴの魅力。ぜひ色々聴き比べてみてください。

大西民子の一音

亡き父のマンツの裾にかくまわれ
歩みきいつの雪の夜ならむ
『花澄るるき』より

岩手のシャロロックホームズといわれたほどの敏腕警察官だった父を、民子はとても慕っていました。職場では厳しかった父も娘たちにはいつも優しく、そんな父のマンツに包みこまれながら歩いた思い出を回想した短歌です。

かねてより大好きな著者の作品の舞台として大宮が出てきた！これはぜひ紹介しなければ！とペンもいハジコンを開いた。
物語は大学に入学したばかりの主人公・美綾(みあや)のもとに、神を自称する犬が現れるところから始まる。現代が舞台のファンタジー作品だ。大宮が舞台になるのは2巻だが、まずは1巻から読むのを勧めます。
2巻の前半で美綾は大宮の祖母の家に住み始める。もちろん氷川神社を参拝するシーンがあり、境内に点在するお社や例祭の説明もしてくる。自分の記憶と照らし合わせてあそこにあるやつかなと思いつくものもあって、そこでも重要な役割を持つ人物と出逢ったり、不思議な体験をしたりするのだが、その全容はぜひ読んでほしい。
この物語の見どころは自称神と美綾の少しずれた掛け合いだ。美綾の「日本人ならよくある感覚」と自称神の「感覚」のずれ。本当にこんなものなのかもしれないと思える。これは著者の萩原規子さんのなせる業だ。

取り扱った本
『エチユード 春二番 第一曲 三日目のボレロ』
萩原規子/著 講談社タイガ 2016年
参考資料
『エチユード 春二番 第一曲 三日目のボレロ』
萩原規子/著 講談社タイガ 2016年



氷川神社が登場する
神様ファンタジー！

推しの伊賀越え

2023年の大河ドラマは徳川家康、演じるのは――。

徳川家康という人物について、私が知っていることは多くない。けれども推しの彼が演じるならばと、俄然興味が高まっている。幸いにも放送開始までは期間がある。ドラマをより楽しむため、予習を始めてみた。

今回予習したのは「伊賀越え」。本能寺の変が起こった翌日、織田信長の家臣の一人として明智軍に狙われた家康は、堺から岡崎へと向かった。その道中では伊賀を通過し抜けた。その時伊賀は難所と危惧されていた。越えれば信長に端を発し、伊賀の地帯を危険視した信長が苛烈な伊賀攻めを行ったため、織田家に連なる者は尽く伊賀の人々から憎まれていたのだ。(ここで以前見た映画「忍びの国」)と繋がったが、これは余談。)

さて、織田側だった家康が伊賀を越えられたのは何故か。逃げてきた伊賀の人々を匿ったことで、伊賀では感謝される存在であったらしい。同じ伊賀にルーツを持つ服部半蔵に人々の処遇を一任したのは、慈悲か策略か。いずれにしろ家康は明智軍に追われながらも伊賀を越え、岡崎へとたどり着いた。この家康の思惑は解釈によって分かれているので、ドラマの中でどう描かれるのか楽しみだ。推しの好感度を守るために、慈悲であってほしい気もするが、策略めぐる推しも見てみたい。それともそのどちらでもないのか、果たして。

この後も史料や小説を読み、自作の年表と人物関係図を携え、可能な限りのリアルタイム視聴と録画予約の準備をしなくては。

参考文献

『覇王の家』 司馬遼太郎／著 新潮社 1997年
 『忍びの国』 和田竜／著 新潮社 2011年
 『時代小説 ザ・ベスト2017』 日本文芸家協会／編 集英社 2017年
 『徳川家康』 藤井謙治／著 吉川弘文館 2020年

高速道路と広くゆったりした公園



大宮景
20

首都高速道路の新都心西出入り口付近に中央分離帯の広場があります。夕陽の落ちる時間帯は長く伸びる街路樹の影が美しく、ゆったりと散歩をしたくなります。南大通線を横断する際の信号機は比較的早く変わってしまうので無理せずこの公園でひと息ついてから進まれてはいかがでしょうか。この日もとても綺麗な夕陽をみることができました。

読書バトル

第8回 テーマ「選択」

今回「選択」というバトンを受けて紹介する一冊は、旅行作家石田ゆづけ氏のデビュー作『行かずに死ねるか!』。この本を手にとったきっかけは今でもよく覚えていて、日々の仕事に追われ、とにかく毎日タタタタと生きていく実感もなかった。そんなある日、打合せの隙間時間に立ち寄った書店でこの本を見かけ、なんとなく手に取ったのだ。

「平和で安定した人生をとるか、自転車世界一周の夢をとるか」。

「後悔しないほう」の夢を「選択」をした著者が、7年半を掛けて自転車世界一周に挑戦したこの冒険旅行記は、デビュー作ならではの瑞々しい文章で書かれ、読み進めるうちに乾いた心がどんどん潤っていきうようだった。

花火のように爆発するオーロラの衝撃、腹に拳銃を押し当てられたベルでの盗難、誇り高きキノコ売りのおじいさんと出会いと別れ。しかも、そんな刺激的な非日常の旅を続けるうちに、やがてそれも日常へと変わり、一力所にとどまり、働くという非日常を求めるようになる。経験という財産を旅の中で培ってゆく逞しい著者とは対照的に、暗澹たる思いで日々を過ごしている自分に問いかけてしまった。今この生活に、生きている手ごたえは本当にないのか?と。

何気なく手に取った本の「選択」が、生き方に影響を与え、物事の考え方も変えるかもしれない。旅すること、そして読書はほんとに素晴らしいと感じさせてくれる、宝物のような一冊である。

というわけで、次へのバトンは世界一周にちなんで、「地球」です。

おなかへった

とにかく甘いのが大好きな私。中でも特に好きなのがチョコレート!小さい頃から、おこづかいを握りしめてはバフ付のクランキーを買いに走ってありました。

小学生の頃の思い出は、何とんでもバレンタイン。好きな男の子に手作りのチョコレートと贈るという、小学生女子にとって、1年の中で最も盛り上がるイベントが、2月14日という日でした。

友達の家に集まりワイワイ言いながら、チョコレートと包丁で削って、湯煎で溶かし、型に入れて好きな形に固める。今考えたら、溶かして再度固めてるだけってどこが「手作り」なん?と突っ込みどころ満載なのですが、とにかく盛り上がってありました。

ラッピングにも工夫をこらし、さて、いつ渡すかと皆で会議し。小学生に人気のある男の子はだいたい偏って(?)いたので、同じ男の子が好きなことも。その頃は真剣なライバルとはならず、和気あいあいとみんなで応援しあっていたような気がします。

『作家のおやつ』に出てくる手塚治虫は、「チョコレートがないと僕は描けません」というくらいチョコレートが好きだったそうです。森鷗外の長女、森茉莉も「私の嗜好品は、まずチョコレートである」と残しており、かつての外來語表記にうっとりします。

色々なおやつ、様々なお菓子の写真を見るだけでもとっても美味しそう!!レトロな感じが郷愁を誘います。また、家族や友人の証言から、作家の人となりが見えたりして、作品では敬遠していた作家をととても身近に感じる本です。



正式名称「行きかう・線」



わたしのきなほん

誰かに贈り物をするときは気合が入ってしまうタイプです。夜な夜なプレゼントのためのリサーチをして、包み紙やシールはどれがいいかな、何色のリボンをかけようか...とあれこれ考え、わくわく・そわそわと過ぎる時間が好きなのです。

くまのおにちゃんたちもそうなのでしょう。たいせつな未っ子ジャッキーのおたんじょうびは、ケーキにかざりつけ、プレゼントに出し物と、準備におおいそがしです。おにちゃんたちの奔走する様子と、そのまわりをちょこまかするジャッキーの愛らしい姿が、誕生日の特別な空気を伝えてくれます。くまのこいびきいびきの表情やしぐさを見比べるのも楽しく、特にジャッキーの親友チャッキーの動きからは目が離せません。

この絵本が好きな姪の誕生日に、おはなしの中のシーンを真似して手紙を届けたことがあります。絵本に出てくるお花やリボンの絵を描いて、文面も似せて...。彼女は絵本の再現だとはわからなかった様子で、単純に手紙が届いたことを喜んでいただけでした。でも驚くかなと想像しながら準備した楽しい時間と、何度も一緒に絵本を読んだ記憶は、今でも私の心に残っています。

誰かをたいせつに思ってもかえる「おたんじょうび」という日が、愛しく待ち遠しく思える一冊です。

紹介した本
 『ジャッキーのおたんじょうび』
 あだちなみ／絵
 あいはらひろゆき／文
 ブロンズ新社 2005年



紹介した本
 『行かずに死ねるか!』
 石田ゆづけ／著
 幻冬舎 2007年



紹介者:草々



twitterではイベントやスタディーコーナーの待ち人数など大宮図書館の情報を日々つぶやいています。ぜひ、フォローしてみてくださいね!

この刊行物の書影画像はBOOKデータASPから引用しています。